

「かわたびほっかいどう大賞」に見る 地域を動かす水辺の力

国土交通省北海道開発局建設部河川工事課

1　はじめに

「かわたびほっかいどう」は、北海道の河川に関わる活動を通じて、地域の活性化や振興を図り、北海道の魅力を最大限に引き出すとともに、河川空間のさらなる利活用を促進することを目的として、平成29年度にスタートしました。

北海道総合開発計画のもと、川の自然環境や景観、水辺の活動、サイクリング環境など、川に関する情報を効果的に発信するとともに、地域との連携を通じて、魅力的な水辺空間の創出と利活用の促進に取り組み、北海道らしい地域づくりや観光振興への貢献を目指しています。

また、「かわたびほっかいどう」ホームページでは、北海道の四季折々の川の魅力をはじめ、水辺で開催されるイベントやアクティビティなどの情報を発信しています。こうした情報発信を通じて、水辺の利用促進を図り、地域の活性化と観光振興を応援しています。

2　かわたびほっかいどう大賞

「かわたびほっかいどう」では、北海道の豊かな自然、風土・歴史・文化を背景に、河川の流域で行われているさまざまな水辺活動の中から、活力ある地域コミュニティの実現や継続性、独創性などの観点において特に優れた取り組みを実施している団体などを表彰する「かわたびほっかいどう大賞」制度を設けています。

「かわたびほっかいどう大賞」は、令和３年度に創設され、令和７年度で５回目を迎えました。対象となるのは、その年の１月から12月までの間に道内各地で実施された活動のうち、各開発建設部の推薦を受けた取り組みです。これらの団体には、翌年開催される「かわたびほっかいどう活動報告会」において活動内容を発表していただき、その発表をもとに大賞および優秀賞を選定しています。活動報告会では、学識経験者などで構成される審査委員が、地域コミュニティの実現、地域の主体的関与など５つの観点から審査を行います。これまでの５年間で、63件の発表が行われ、その中から５件の大賞と11件の優秀賞が選定されました。

令和３年度に開催された第１回活動報告会では、全

道13件の発表の中から、金山郵便局と札幌開発建設部滝里ダム管理支所が連携した「金山風景印」の取り組みが「かわたびほっかいどう大賞」に輝きました。この取り組みを通じて、「風景印」の存在をはじめて知った方も多かったのではないでしょうか。

ここでは、令和８年２月に開催された、「令和７年度かわたびほっかいどう活動報告会」において、大賞および優秀賞を受賞した２つの取り組みをご紹介します。

表　かわたびほっかいどう年間活動計画数と活動報告会発表件数

単位：件

年　　度	R３	R４	R５	R６	R７	計
年間活動計画数	244	316	355	356	346	1,617
活動報告会発表件数	13	13	13	13	11	63

3　令和７年度かわたびほっかいどう活動報告会

５回目を迎えた令和７年度の活動報告会は、令和８年２月に開催され、全道各地で１年間に計画された340件を超える取り組みの中から、地域が主体となって多くの人々を巻き込みながら展開された、創意工夫あふれる11件の取り組みが紹介されました。また、活動に参加した高校生による発表が行われるなど、次世代へとつながる活動の広がりを感じられる報告会となりました。

⑴　えべつかわまちフェス2025（大賞）

大賞に選ばれたのは、江別市で活動する、えべつのまちづくり株式会社と札幌開発建設部江別河川事務所が連携して取り組んだ「えべつかわまちフェス2025」です。この取り組みは、石狩川と千歳川の合流点地区において開催されました。

えべつのまちづくり株式会社がこの地区に注目したのは、この地区の歴史的な背景に理由があります。この地区は条丁目地区と呼ばれ、明治から大正時代にかけて、当時「江別川」と呼ばれていた現在の千歳川に設けられた江別港と鉄道が接続する交通の要衝であり、舟運による貨物の積み替え拠点として江別の発展を支えました。現在も倉庫群の跡地が残るほか、江別河川防災ステーションには外輪船「上川丸」のレプリカが展示されており、漫画『ゴールデンカムイ』に登場した船として知られています。そのため、同施設は、作品のファンが訪れる聖地巡礼スポットにもなっています。

この地区での活動は、2013年にまちづくりメンバーによる郷土研究の一環として江別市条丁目地区の景観的価値を分析したことをきっかけに始まりました。翌年にはNPO法人を立ち上げ、以来、「かわ×まち」をテーマにワークショップやミズベのロングマーケット、ミズベキャンプ、かわまちフェス、エキテラなど多彩な取り組みを継続的に実施してきました。

さらに、令和４年には国土交通省の「かわまちづくり支援制度」において、「江別市かわまちづくり計画」が登録されました。舟運で栄えた条丁目地区の歴史を生かし、旧岡田倉庫を核とした、川とまちが一体となるにぎわい空間の創出を目指した活動が進められています。「えべつかわまちフェス2025」も、その取り組みの一環として開催されました。同フェスは、令和７年９月７日に高水敷を利用した「大川通」で開催されました。当日は、飲食屋台やキッチンカーが並んだほか、大学生が企画したサウナ体験、シャボン玉ショー、焚き火とマシュマロ体験など、子どもから大人まで楽しめる企画が数多く実施されました。また、江別市出身の陸上選手・右代啓祐（うしろけいすけ）氏によるジャベリックボールの投げ方教室も行われ、来場者の関心を集めました。来場者は800人を超え、大きなにぎわいを見せました。

この取り組みの大きな特徴は、地域のまちづくりを持続的に進めるため、「えべつのまちづくり株式会社」を設立したことにあります。さらに、市内４つの大学と連携し、学生が企画・運営段階から活動に参加することで授業の単位取得につながる仕組みを構築しました。こうした体制づくりにより、継続的な人材確保と若い世代の参画を実現しています。

「えべつかわまちフェス」の名称で開催されたのは今回が初めてですが、「江別市かわまちづくり計画」の登録以降、「シン・エベツ」、「エキテラ×江別かわまち」など、さまざまな取り組みを年間通じて展開しており、その積み重ねが今回の活動につながりました。



えべつかわまちフェス2025 ～シャボン玉ショー

活動報告会では、えべつのまちづくり株式会社の代表取締役の林匡宏（はやしまちひろ）氏が活動内容を発表しました。審査委員からは、「１）まちづくりのために株式会社を作るとは珍しい」「２）江別市外からの参加者はあるか」「３）４つの大学で共通の授業単位になるのはすごい。経緯が知りたい」などの質問･意見が寄せられました。林氏は、「１）これまでまちづくり活動を担ってきた組織を発展的に解消し新たに株式会社を設立した。その主な目的は資金調達をしやすくすること。一方でまちづくり活動そのものは､これまでと変わらず「シン･エベツ」が主体となって取り組んでいる」「２）江別市内からの来場者が一番多くおよそ５割、次いで札幌市内からの来場者が４割弱であった。江別市は札幌市に近いことから、かわまちづくり計画を含めた江別のまちづくりが、将来的にはさっぽろ連携中枢都市圏に属する12市町村の中の目玉事業のひとつとなることを目標としている」「３）活動を大学の授業単位として認定する制度は以前からあったが、手続きが複雑なため十分に活用されていなかった。そこで、えべつのまちづくり株式会社が手続きを支援・代行することで、各大学の教員が制度を活用しやすい環境を整えた」と説明がありました。

その後公表された審査結果において、本取り組みは「かわたびほっかいどう大賞」を受賞しました。審査委員からは、「年々、地域を巻き込みながら取り組みが進化している。株式会社設立によるまちづくりの仕組みづくりや、４大学との連携を生かした独創的な活動は、地域コミュニティの実現や地域の主体的関与の観点で高く評価できる。また、他地域に新たな視点を示す先進的な事例であり、12年にわたる継続的な活動と多様な主体との連携が際立っている」との講評が寄せられ、高い評価を受けました。



えべつかわまちフェス2025 ～サウナ体験

⑵ ダウン・ザ・テッシーオーペッ2025（優秀賞）

優秀賞に選ばれたのは、NPO法人ダウン・ザ・テッシと旭川開発建設部名寄河川事務所が連携して取り組んだ「ダウン・ザ・テッシーオーペッ2025」です。

この活動は、1992年に第１回大会が開催され、今回で32回目を迎えました。活動の原点は、現在NPO法人ダウン・ザ・テッシ理事長を務める酒向勤（さこうつとむ）氏が、カヌー競技を通じて地域振興に取り組もうと北海道カナディアンカヌークラブを結成したことにあります。酒向氏は天塩川流域各地でカヌー製作の実演や指導を行い、その活動をきっかけとして流域内に多くのカヌークラブが誕生しました。こうした広がりの中で、「カヌーを通じて天塩川流域の地域振興を図ろう」という機運が高まり、1992年にダウン･ザ･テッシーオーペッ実行委員会が発足し、第１回大会が開催されました。

天塩川は、流路延長256kmを誇る全国有数の大河であり、名寄市から河口までの約157km区間には河川を横断する人工構造物がないことから、カヌーによる長距離ツーリングを楽しむことができます。大会では、毎年区間を変えながら２日から４日間かけて下ります。運営は、流域内のカヌークラブが自らの地域を訪れるカヌー愛好家を迎え入れる形で行われており、これまでに全国から5,000人を超える参加者を集めてきました。また、北海道命名150年を記念して開催された2018年大会では、157kmの全区間を３泊４日で下る国際大会として実施され、日本を含む世界５か国から参加がありました。活動の発展に伴い、運営体制も実行委員会形式から、2018年にNPO法人へと移行しました。その目標は大会規模の拡大だけではありません。流域の自然や文化を次世代に継承し、その価値をさらに高めていくことこそが、流域に暮らす人々の役割であり責任であるとの考えのもと、さまざまな活動が展開されています。



ダウン･ザ･テッシーオーペッ2025 ～天塩河口大橋から

活動報告会では、NPO法人ダウン・ザ・テッシ副理事長の吉川一茶（きちかわかずさ）氏が活動内容を発表しました。発表に対して審査委員からは、「１）道外参加者の割合はどのくらいか」「２）イベントを手伝っている大学生に単位を与える大学があるとのことだが、それはいつ頃から始まったのか」との質問が寄せられました。吉川氏は、「１）道外からの参加者は例年全体の約２割を占めている。2025年大会は開催時期が例年より遅かった影響もあってか、その割合は約１割となった。また、2018年に開催された国際大会では、アメリカ、カナダ、ロシア、韓国からの参加者を迎えた」「２）このイベントを30年以上継続する中で、当初から参加していた大学の教員が活動の魅力に着目し、大学の教育課程見直しに合わせてアウトドアライフに関する講座を開設した。講座では、「ダウン・ザ・テッシ」の大会運営をはじめ、カヌー製作や各種施設での活動支援など、地域や自然に関わるさまざまな実践活動が行われている。大会運営に参加する学生は、開催の１週間前から現地に滞在し準備や運営を支えている。また、この大学以外にも多くの大学生がボランティアとして参加しており、大会の運営を支える大きな力となっている」と回答しました。

審査委員からは、「40年近くにわたり、カヌーイベントをはじめ、清掃活動、安全講習会、河川パトロールなどの取り組みを継続していることは、地域コミュニティの実現や地域の主体的関与、継続性の観点から高く評価できる。また、流域の複数市町村をつなぐ広域的な取り組みとして発展し、実行委員会からNPO法人へと組織を強化しながら、全国から参加者を集めるなど、地域活性化への貢献も大きい」との講評が寄せられ、その継続性と広域的な活動が高く評価されました。



ダウン･ザ･テッシーオーペッ2025 振老（ふらおい）カヌーポート



令和７年度かわたびほっかいどう活動報告会　参加者一同

4　かわたびほっかいどう活動報告会に参加する取り組みの特徴

これまで活動報告会で発表された63件の取り組みには、今回受賞した２つの取り組みにも見られるように、長年にわたり継続されているものや、地域が主体となって多様な人々を巻き込みながら展開されているものが数多くあります。また、活動の発展に合わせて組織体制を強化するなど、活動団体自らが進化を続けていることも大きな特徴です。さらに、活動を担う人材を継続的に確保する仕組みづくりや、活動を力強く牽引するリーダーの存在も、多くの取り組みに共通して見られる特徴といえるでしょう。

5　これからの「かわたび大賞」

「かわたびほっかいどう大賞」は、令和８年度から「かわたび大賞」として新たなスタートを切りました。公募方式の導入により、これまで以上に多様な活動との出会いが期待されています。応募方法などの詳細は、「かわたび大賞」で検索していただくと、北海道開発局ホームページの「令和８年度かわたび大賞の応募について」のページをご覧いただけます。

北海道の川や水辺で地域を元気にする取り組みを実践している皆さまからの応募をお待ちしています。



令和８年度かわたび大賞募集広告